安部公房全作品

12

新潮社

安部公房全作品12
定価 700円

印　刷　昭和48年4月15日
発　行　昭和48年4月20日
著　者　安部公房（あべこうぼう）
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
〒162 東京都新宿区矢来町71
振替 東京808　電話(03)260-1111
印刷所　大日本印刷株式会社　製本所　大口製本
© 1973, Kōbō Abe, Printed in Japan
乱丁，落丁本はおとりかえいたします。

安部公房全作品 12 目次

耳 5
こじきの歌 21
棒になった男 39
円盤きたる 53
人間そっくり 79
詩人の生涯 111
日本の日蝕 129
煉獄 157
人命救助法 191
吼えろ！ 223
羊腸人類 241
審判 257
目撃者 271
白い朝 291
おとし穴 301

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

安部公房全作品

12

耳

〔登場人物〕

耳　（貝野二郎）

母親

追手A

〃B

駅員

声　（数名）

（陽のあたらないしめっぽい場所にはカビがはえる。心の日陰や日陰の心にもカビがはえる。
言葉のカビである。
嘆き、のろい、ささやき、陰謀、カゲ口、かげごと、悪口、そしり、そねみ、つぶやき、ねたみ、ののしり……いろんな種類のいろんな色をしたカビである。
とくべつカビの多いところでは、特別な耳がそだつ。カビの養分をすいとって成長した、毒キノコのような大きな耳……
これは、そういう耳の物語の一つである。
音楽……ややあって、効果音、国電某駅改札口付近の雑踏に変る。
切符自動販売器に十円入れる音。
ハンドルを押す音。

機械が内部で廻転して、切符のすべり出してくる音。
〔不思議に、ふつうの自動販売器より時間がかかって重々しい音がする〕
引きずるような足音と、ともにマイクが移動して、改札口……切符を切る音）

駅員　あ、あんた、駄目ですよ。
貝野　え？
駅員　（不愛想に）これ、切符とちがうじゃないか。
貝野　だって、たった今、そこの販売器で、十円入れて……
声　おいおい、急いでくれよ。
駅員　よく見なさいよ。傷害保険の受け取りでしょうが。
貝野　ああ……
声　おっさん、器械をまちがえたんだろう……
別の声　（嘲笑的に）耳だけはでっけえが、目のほうは、さっぱり利かねえとみえるな……（笑って通りすぎる）
（切符を切る音が次第に嘲けるような、雑踏を表現する音楽に変る）
追手A　しーッ！……（押さえた声で）耳だぜ。
追手B　（押さえた声で）どれ？

追手A　改札ロンとこ。あのきたねえ靴ふきみてえなシャッポの野郎……でっけえ耳がはみ出してるだろ。
追手B　そうだ、野郎だ。
追手A　おめえ、左側からまわりな。おれはこっちから行く。
追手B　よしきた！
追手A　（遠ざかりながら）どじふむなよ、うまくやっつけりゃ、一万円の駄賃だ。

（音質の変った雑踏の効果音……遠くで町の広告塔の声。「皆さま、旅行シーズンにそなえて、古田屋のレインコートを、お忘れなく。もちのよさ、スタイルのよさ、値段のよさと三拍子そろった古田屋のレインコートは、レインコートの古田屋、古田屋のレインコートとして皆様に永年愛されてまいりました。信用ある製品で、一度お召しになった方は、誰もが口をそろえて、その着心地のすばらしさを、申されますが、無理もございません。古田屋のレインコートは洗練された高度の技術と……」ゆっくり消え、かわりに駅の雑踏が高くなり、遠くホームのアナウンス）

追手A　おい、どうした！
追手B　どうしたって、おめえこそどうした。
追手A　そっちに廻ったろう。
追手B　来るもんか！
追手A　おかしいな。
追手B　じゃ、中にはいったのかな？
追手A　そんなはずはねえ。おれはちゃァんと見てたんだ。
追手B　その切符切りの兄さんに聞いてみな。（同時に切符を切る音がしはじめる）
追手A　おい兄さん、今、ここを耳のでっかい男が通ったかい？
駅員　（鋏の音をさせながら）え？
追手B　いましがた、おめえと何だかしゃべくってたじゃねえか。こんなふうに、耳のでっかい男よォ。
駅員　ああ、あの人。いや、どこかむこうのほうへ行きましたよ。
追手B　まちがいねえな。
駅員　切符を持ってなかったんだからね、通れるわけがないですよ。
追手A　それみろ！
追手B　ちえっ、うめえことずらかりやがった。おれたちのこと、かぎつけやがったのかな。
追手A　……とすりゃ、おめえのドタ靴のせいだぞ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

追手B　馬鹿いえ。あいつの耳はネコの足音だって聞き分けるんだ。
追手A　ふん。
追手B　五十メートルはなれたところから、まばたきの音でも聞き分けるって話だぜ。
追手A　それじゃ、ここで、こうして、しゃべくってることだって、どこかでちゃァんと聞いてるかもしれねえな。
追手B　（声をひそめて）まったくだ。

（音楽――）

母　（女教師ふうなゆとりを見せて）どうしたの、そんなに赤い顔して。
貝野　（息をはずませながら）赤いのは耳だろ。おれの顔は赤くなんかなりゃしないよ。血がぜんぶ耳のほうにいっちゃうんだ。誰だって耳は顔にくっついているものなのに、おれのは、反対に、顔が耳のあいだにはさまってるんだからなァ。おれの顔はいつだって谷間みたいに暗くて、ひからびてるのさ。
母　どうしたってのさ？
貝野　もう駄目だ。やっと逃げ出してきたんだよ。三田村の子分にねらわれてるんだ。
母　三田村？　まさか……
貝野　駅に張ってやがった。聞いちゃったんだよ。おれを殺ったら、一万円なんだって。
母　おまえの耳なら、間違いはないだろうけど、でも、なんだってまた……
貝野　おれが知りすぎているからさ。
母　おまえが知ってるのは、あいつのことだけじゃないよ。
貝野　だから、こんなふうに、みんなから嫌われるんじゃないか。
母　仕方がないよ、悪をあばいて悪人をこらしめるのが、おまえの商売なんだからね。
貝野　おれのじゃないよ、母さんのだよ。
母　知られて困るようなことをするやつが悪いのさ。
貝野　きれいごというのはよそうよ。要するにユスリで食ってるんじゃないか。
母　誰だって、食べなきゃならないんだからね。むこうがその気なら、こっちだって、うんとこさゆすらせていただきましょうよ。
貝野　もう沢山。おれはもう厭んなっちまった。だって、母さん、おれたちは世間でも一番の悪党って言われるやつをゆすって食ってるんだ。悪党よりもひどい悪党だっ

て言われても仕方ないんだぜ。

母　まあ、人聞きが悪い。こっちは一件たかだか、二、三千円のかせぎじゃないの。それも週に二つか三つ。つましいものよ。そんなすてきな耳をもっているっていうのに……

貝野　母さん、おれ、この耳、切りおとしてしまいたい。

母　なんですって？

貝野　このままいたら、おれ、きっと殺されちゃう。殺されるよりは、耳をなくしちゃったほうがいい。耳を切ってあやまれば、三田村だってきっと許してくれると思うんだ。

母　臆病たれ！　母さんが丹精こめて育てた耳なのよ。なんてこと言うんだろう。昔から、大きな耳は福の耳……

貝野　育ちすぎたんだよ。過ぎたるは及ばざるがごとしで福の耳が象の耳になっちゃった。

母　それが現在、立派に役に立ってくれているんだから、文句言うことないわよ。

貝野　（必死になって）母さんには分らないのかなあ。おれはただ恐がってるんじゃないんだ。こんなふうに、なんでも聞えすぎるってことが、もうたまんないんだよ……

（地鳴りのような、怪しい音）

貝野　いま、こうしていたって、壁二つへだてた隣の家の話し声がちゃァんと聞えているんだ。

（前の物音にダブッて、〔だから、そこをなんとか……三十ですかい？……二十でうって、二十五、三十とつりあげてさ……まあまあ、いいから……ばあっと、こうしてですね……ハハハハ……云々〕）

貝野　通りのむこうの家の音だって、すぐそこで聞えている。

（前の音にさらにダブッて、食器の音、紙を破る音、赤ん坊の泣声、等々）

貝野　夜になって、音のとおりがよくなると、町じゅうが、わァわァ音で渦巻く。

（奇怪な音の洪水）

貝野　聞くまいとすると、よけい聞える。耳に消しゴムつめたって、もう駄目さ。地球ぜんたいが吠えているんだ！

（ますます高まっていく奇怪な音。地球の叫び、すすり泣き……急速に消え去る）

貝野　皮をむいた世間ってのは、厭な音でいっぱいなんだよ。おれの耳は、その音の毒を吸いとって成長したんだ。きっと、まだまだ大きくなるよ。この調子で発達していったら、しまいには星の音や地球の芯でもえている火の音まで聞えるようになりそうだな……おれは、あんまり一人ぼっちな感じがして、それが恐いんだ。

母　（ぼっとしたふうで）そうね、考えてみりゃ、たしかに、三十近くにもなってまだ独身だなんて、衛生上よくないかもしれないわね。

貝野　くだらない！

母　自信をお持ちよ、片輪者じゃあるまいし。

貝野　片輪じゃない、この耳で？

母　惚れぼれするわ。

貝野　（がっかりして）おれ、男だろうと、女だろうと、なかく一緒に暮らすことなんかできやしないよ。

母　（ちょっと得意気に）おやおや、母さんとは三十年も一緒に暮らしたくせに。

貝野　（弱々しく）悪いけど、母さんとだって、やっと我慢しているんだよ……人間が、ふだんどんな音をたてているか、母さんに聞えたらなあ……

（人間の音――呼吸や皮膚のきしりや内臓の音。ゼーゼー・ゴボッ・ドドドド・ギュウ・ゴボッ・ゼー・ブツン・ドドッドドッ……等々）

貝野　（虚ろに）人間なんて、皮をかぶったハラワタさ。おれが好きなのは、鉄やガラスや石みたいに、そっとしておけば音のしないものだけ。どうしたって一人ぼっちなんだよ……（内臓音消え）耳を切りとって、一度でもいいから人間らしくなってみたい。本当いうと、おれだって、好きな女の子がいないわけじゃないけど、耳のことを思うとなあ……

母　（勢いとんで）誰なの、その娘、私が行って話してみてあげるよ。

貝野　いやだ！　おれは、あの娘がハラワタの音をたてるのを聞きたくない。あの娘だけは、音がしないんだと思っていたいんだ。ずっと遠くから想像しているだけでけっこうさ……（さぐるように）でも、もし耳を切ってしまえば、あきらめなくてもいいのかな。

母　めっそうもない。耳をなくして、どうやって食べてい

くつもり？　週刊誌にも書いてあるじゃないの、男の魅力はなんたって生活力だって。

貝野　（きっぱりと）母さん、そのことで、ちょっと相談があるんだけどな……

母　なんなの？

貝野　ほら、これ、耳にもちゃんと値段がついてるんだよ。

母　……

貝野　保険だよ、簡易傷害保険っていうんだ。十円入れてハンドル押すと、この券が出てくるんだよ。こんな器械があるなんて知らなかった。普通の切符の販売器とまちがえて入れちゃったんだ。この券の半分に、時間と名前を書いてあの器械に戻すと、三日間、二万円の保険がつくんだって。一人二十枚まで掛けられるっていうから、あと百九十円買えば、四十万円の保険がかけられるわけだな。ね、ほら、その裏に書いてあるだろ。傷の場所によって、もらえる率がちがうんだ。両眼の視力を失いたるときが全額、手足が半額、鼻が二割五分、片方の耳が二割、手の指が五分、足の指が三分……耳ってのはけっこう率がいいんだね。なくても大して困らないものなのに、あんがい率がいいだろ。四十万の二割だから八万円だ。両方の耳おとせば、合わせて十六万円。わるくないだろう。ただ、ヤミクモに耳を切ろうって言ってるんじゃないんだよ。ちゃあんと、考えたうえでのことなのさ……ね、これなら安心だろ。耳をおとして、十六万もらって、それでなにか、まともな商売はじめようよ。いっしょうけんめい働くから……

母　……

貝野　ね、いい考えだろう。いい考えだと思うだろう。

母　うるさいねえ、私にもちょっと考えさせてよ。

貝野　……

母　ここ、なんて書いてあるの？

貝野　（読む）当保険は被保険者が急激かつ偶然なる外来の事故により身体に傷害を被りたるときのみ、保険金を支払うものとす。

母　なるほどねえ。

貝野　（勢いこんで）実際、こんな生活、もうやめにしなけりゃ。

母　十六万ね……

貝野　そうだよ、真面目に働けば、立派にやっていけるよ。

母　でも、耳は使っても減らないけど、金は使えば減るからねえ。

貝野　耳はなくなっても、おれは残るよ。手も足も、立派

に残るんだ。

（間）

母　（ぼんやり）それもそうねえ、おまえの耳はなくなっても、他人の耳は残るわけね。

貝野　え？

母　（独り言のように）他人の耳は、たくさん残る。耳一つが八万円……

貝野　（不安気に）なんの話さ？

母　（夢みるように、次第に調子を上げて）そういうわけねえ……やっぱり、耳が幸せのもとっていう母さんの考えに、まちがいはなかったのさ……おまえの言うとおりにしてもいいよ、耳で、保険をもらおうじゃないか。

貝野　（気がかりらしく）ねえ、他人の耳って、なんの事？

母　おまえ、たしか、耳なんかなくてもいいって言ったっけね？

貝野　うん。

母　だから、そのいらない耳を、一万か一万五千で、みんなから買い集めてさ、切り落してやって、保険金にしようってわけよ。これなら、立派に商売になるわ。おまえの十六万を、もとでにして……

貝野　……冗談、なんだろう？

母　耳なんかいらないって言ったのは、おまえなんだよ。

貝野　そりゃそうだけどさ……

母　なら、いいじゃないの。ねえ、内輪にみつもって、耳一つで二万五千ずつもうかるとしてごらん、一日一人ずつやったとしても、月に七十五万。そのうちから、五万ふんぱつして、人を五人やとって、一人に一人ずつ請負わせたら、七十五万の五倍から五引いて、ええと、三百七十万。一年になおすと、四千万ちょっと。四千万だって、ホホ、ホホ、ホホ……

（苦しげに、笑うような音楽……引きさかれるように、急に電車が走る音に変って、駅のアナウンス）

追手A　（アナウンスにかぶせて）おい、耳だ！

追手B　こんどこそは、ぬかるなよ！

母　（近づきながら）ちょっと、おたずねしますけど……あなた方、三田村一家の身内の方たちでござんしょう？

追手B　し、知らねえよォ。

母　まあ、お上手だこと、ちゃんと存じ上げていますのよ。私、貝野の母親ですの。

追手B　カイノ？

追手A　（Bに）耳のこったよ！
母　あなた方、うちの息子を、どうなさるおつもり？
追手B　し、知らねえったら！
母　事と次第じゃ、私たち、あんがい話が合うんじゃないかしら。
追手B　変なこと言うなよ、小母さん……
母　あの子はね、条件によっちゃ、あなた方につかまってあげてもいいつもりらしいの……嘘じゃないわ……ほら、あそこに立ってこっちを見てるでしょう、私たちの話を聞いているのよ。ねえ、二郎、聞えているわよね……ほら、うなずいたでしょう。
追手A　感じよくねえな。
母　あの子のほうで、その気になってくれなけりゃ、とてもあなた方の手には負えそうにないわね。
追手B　うん……
母　この辺で、おたがい、手をうたないこと。
追手A　ふん。（と鼻をならす）
母　つかまってあげるかわりに、暴力沙汰はよして、耳だけとるようにしていただきたいの。べつに困ることはないでしょう。うるさいのはどうせ、あれの耳だけなんだから。
追手B　そうかな？
追手A　そりゃ、まァ、そうだな。
追手B　そうっと、おとなしくつかまって、耳を切らしてくれるってんなら……
追手A　なにもそれ以上、事を荒らだてるこたァねえわけだ。
母　ほうら、二郎、母さんの言ったとおりだろ、ちゃあんと話がついてしまったよ。……と言ったら、ね、あのとおり分って、こちらにやって来るでしょ。
追手B　本当だ、かなわねえ……

（短い音楽――）

母　いいこと、もう一度言いますからね。電車がはいったらすぐ、あなた方二人が乗り込む。ドアが閉ろうとするまぎわに、二郎が駈けこむから、一人が耳をつまんで引っ張りこんで、もう一人が反対につきとばすの。そこにドアが閉って、うまい具合に、二郎の耳だけがはさみ込まれる。大きな耳だから、うまくいくわよ。電車が走りはじめたら、おまえはウンとふんばるの。少しくらい痛くても、走ったりしちゃ駄目よ。すんでしまえば、それでさっぱり、けりがつくんだから。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook